
ゼロの中二病

リュアナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの中二病

【Nコード】

N9229X

【作者名】

リュアナ

【あらすじ】

神にチート能力を貰った主人公がゼロの使い魔の世界で暴れちゃいます。

初心者なので、駄文、ご都合やアンチなどあります。嫌な方はUターンしてください。

感想を貰えるとありがたいです。

1話（前書き）

初心者なので、駄文、ご都合やアンチなどあります。嫌な方は
インしてください。

感想やアドバイスをしていただけるとありがたいです。

1話

「あゝここはどこだ・・・あ、それより俺に突っ込んできたあのトラックの運転手はどこに行きやが・・・お前なに見てんだよ」

そこには白い服を着た上半身裸のジジイがこつちをすまなそうに見ていた。

「・・・すまんお前を殺したのはワシの手違いなんじゃ・・・」
そう言うと、この腐れジジイはすべてを説明した。

「お前のミスで俺は殺された訳だな、どう責任をとってくれるんだ・・・このクソジジイ」

「うむ・・・他の世界でよかったらプレゼント付きで転生させよう」
転生だと・・・最高じゃーねえかこれなら死んだかいがあるじゃねえか

「じゃあそれで、つかそれにしろ」

「うむ、分かった・・・して願いは当然チート能力じゃろ」

「よく分かってるじゃねえか、じゃあ願いを言うぞ、付ける能力は

ゲートオブバビロン

王の財宝庫をくれ当然全ての派生も入れる後は真名解放も出来るようにして、財宝などの金や生活に役立つ物と、能力（容姿も）はギルガメッシュと同じで、それとdmcシリーズの武器全てだ。つと武器はすべて使いこなすことが出来るようにしてくれ、それと転生する世界はゼロの使い魔の世界にしろ」

これなら俺のハーレム&原作ブレイクが出来るはず・・・ニヤリ

「・・・ふゝ能力添付終わったぞ、能力を試してみなさい」

何も変化を感じないんだが・・・まあ良い

「ゲートオブ・・・バビロン」

お、思ってた以上だな生バビロンの威力は、これなら他も大丈夫だろ・・・

「もう良い・・・俺は行く」

・・・最高だ

「分かった。おぬしを送る、殺したワシが言うのも何だが二度目の生を謳歌してくれ」

「ああ、言われずとも謳歌するさ」

まってるよ俺の女ども・・・

そう言い残し彼は光に包まれ消えていった。

「行ったか」

1 話（後書き）

感想やアドバイスをしていただけるとありがたいです。

2 話（前書き）

相変わらず文才皆無だわ

2話

「我が名は『ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール』。五つの力を司るペンタゴン。私の運命に従いし、^{さため}＜使い魔＞を召還せよ！」

呪文が完了した瞬間、大きな爆発音が響くそして土煙が消えその中からルイズが召還したソレが姿を現した。

「問おう、お前が私のマスターか？」

まあ聞かなくても分かるんだがな・・・一度は言いたいセリフだしね

なに・・・この平民・・・有無を言わせないような圧倒的な威圧感がある・・・こんな威圧感はお母様以外に感じたことのない・・・いいえ、多分お母様よりすごい・・・

そんなことを考えていると周りの生徒達が

「おい、ゼロのルイズが人間を召喚したぞ！」

「おいおい、平民なんていつ用意したんだよ？」

等々罵声を浴びせ初めた。

「おい、その雑種、お前がマスターではないのか？早く契約をしる、我を待たせるなど万死に値する」

マジ早くしろよなこの小娘が、どうせ我がサーヴァントになるんだからさっさと契約しろよなまったく・・・貴様なぞ相手にする時間をもつたない

「コルベール先生！ やり直しさせて下さい！」

こんな得体和貴族に対する敬意の欠片も無い平民なんて、絶対嫌だ。

「それはいけませんぞミス・ヴァリエール」

「何故ですか？！」

「サモン・サーヴァントは非常に神聖な儀式、やり直しは効きません」

「う……でも！」

「それが何であれ喚び出された以上は貴女にとって重要な存在なのです。いいですね、彼と契約するのです。そうでなければ残念ながら貴女は進級出来なくなりますぞ。」

「うう……」

「儀式を続けたまえ」

「うう分かりました。コルベール先生……」

「フン、やっと契約をする気になったか小娘」

く、この平民後で覚えてなさい……

「我が名は『ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール』。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

「ツチ」

地味にいてえ……まあサイトが悶える痛みを地味程度で済ます事が出来るだけでマシか……

「終わりましたコルベール先生」

「サモン・サーヴァントは失敗しましたが、コントラクト・サーヴァントには成功したようですね」

「平民だからねえ」

「そいつが高位の幻獣だったら契約なんて出来ないって生徒達の中からそんな嘲りにも似た笑い声上がる。」

「なっ！ば、バカにしないで！」

さつさとこのこのウザいのを黙らせるか……

「おい、雑種ども騒ぐのもいい加減にしろ……私の気が変わらぬ内にな」

「おい、お前貴族に対する口のきき方を教えてやるよ」

貴族が杖を構えた瞬間にはすでに我は断罪の鎌を軽く振っていた……そして魔力が宿った刃がクソ貴族の腕を落としていた。

「え……ああああああああああああああああああ」

「ふん、雑種如きが我にたてつこうとは愚かな……雑種よ精々地

を這うがいい」

他の貴族たちも啞然としている・・・最高の気分だチート能力がここまでとはな、コルベールが生徒を静めて近くにいる生徒に何やら指示をだしている、おや、こっちに來たな

「少し話があります。」

「なんだ？」

「確かにこちらに責任がありましたがあそこまでする必要あったのですか？」

このハゲ少しキレてるよ（笑）

「あの小僧が先に仕掛けたこと、我がやらなかったら我がやられていたわ」

「ぐ、確かに・・・」

「オイ、マスター我は町に行く、安心しろ夜までには帰る」

「「待ちなさい（待ってくれ）」」

「今回は納得する、とりあえずそのルーンをスケッチさせてくれな
いか・・・そのルーンは見たことがないんだ」

「後にしろ」

めんどくさい

「ちよつとあんたご主人様を置いて町に行くって・・・それに私の
名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエー
ルよあんたの名前をおしえなさい」

「ふん、我の名はギルガメッシュ」

やってやったぜ今日から俺はギルガメッシュだぜ・・・サイコーー

ーーーーー

つと喜ぶのは後にして町に行くか。トウ・・・・・・・・・・さすが
チートギル様（まあ俺なんだが）全ての能力高すぎだろ軽く飛んだ
だけで250m位飛べるとか・・・

「ちよ、待ちなさいーーーーーいギルガメッシューーーー」

私の願いは届かなかった（泣）

2話（後書き）

疲れた〜イヤ・・・マジで

3 話（前書き）

感想やアドバイスありがとうございます。

ギルは元の性格がこんななのでこれからもこんな感じで行きます。

3話

「ふう、やっと着いたか・・・」

どれ、フラグの下準備でもするかな、そう思いながら町を歩いていると

「この、平民のクソガキの分際で貴族であるワシにぶつかるとは、殺してやる」

そう言いながら怒声を上げている馬鹿そうな雑種（貴族）ともう殺されると思い、絶望に声を上げることすら出来ない少年、そして、かわいそうな物を見るような平民達がそこにはいた。

そして、ギルガメツシュは全てが気に入らなかった。

「ツチ、雑種が・・・」

手を出したいが、出したら国の兵士どもも来るだろう、そうすると下準備が出来なくなる・・・

「何かないか・・・」

そうつぶやき、バレないように、バビロンの中に手を入れた。そして、見つけ出した・・・それを・・・

「ふ、我がこんなものを付ける事になろうとわな」

それは、白い仮面だった・・・かの英霊ハサンが付けていた物だ
本家ギル様らしくはないか・・・と思いつつギルガメツシュは仮面を付け、歩き出した。

「おい、その小僧、助かりたいのならあらがえ、あきらめるな、それともその雑種に、無様に殺されるか？小僧」

あきらめを捨てて、助けてと言えばそれで良し、何も言わなければそれまでだ。

「オイ、貴様何言つてんだよ、貴族に平民が勝てるわけないだろ・・・殺されたくなければ・・・」

い、嫌だ・・・死にたくない・・・そこのお兄さん助けて下さい。お願いします。」

言ったか・・・

「フハハハハハ、良いぞ小僧その努力に免じて我が助けてやろう」
そう言いながら、バビロンから閻魔刀をとりだした

「助ける？お前も一緒に殺してやるよ」

ん？なんだ・・・この平民一瞬で武器を手元に・・・まあ良い

「先手は譲ってやるよ」

この距離なら俺の魔法の方が早いからな

「雑種如きに先手を譲られるとわな」

「その強がりは何時までもつかな？」

「“Rest in peace.”」

決め言葉とともに閻魔刀を素早く抜刀した。

「終わりだ」

「は？馬鹿かお前」

“Die!”

静かに鞘に刀を納めた。そして（チン）この音が聞こえると、同時に貴族の体は真つ二つに切れていた。

3話（後書き）

めちやくちゃ寝み
いいいいいいいい
いいいいいいいい

あと、オリジナルストーリーは1・2話やります。

4話（前書き）

リアル生活忙しすぎ

4話

「フハハハハハ、小僧・・・なかなか楽しかったぞ。」

「ひ、うわああああ」

「受け取るがいい」

そう言うのと、貴族の財布から金貨を出し少年の前に置いた。

「おい、貴様らそこを退け」

遠くで兵隊たちの声が聞こえた。

「つち、雑兵どもがもう嗅ぎつけたか・・・我はもういく、精々生き延びろ小僧」

さて、黄金律スキルを試すか・・・

2時間後・・・

「さすが黄金律・・・結構たまつたな」

まあ、すでにいろいろ持つてるから要らないんだけど・・・

「さて、まずはデルFRINGERを手に入れるか」

そう言いながら足早に店に行った。

「原作どつり最悪な場所だなおい・・・」

そう言いながら店に入った。

「旦那、貴族の旦那。ウチはまっとうな商売をしてまっさあ。

お上に目を付けられる様な事はコレっぽっちも御座いませんや。」

「我は、客だ」

相変わらずキモいな・・・こいつ

「へ??客でしたか。そりやまたアリガタイ事で。」

「確か、店の端っこにあつたはず・・・」

「ヤイ。テメー。このデルフ様に触るんじゃないネー。」

あつた・・・

「誰だ?今の声は?」

一応聞いておく。

「ウルセー。テメーは目クラか?俺様が見えないってーのか?」

「どこに居る？」

よし、ウザい

「そんな目クラにや用はネー。帰って母ちゃんのオツパイでも飲みやがれてんだ。」

「やい、デル公。お客様に失礼な事を言うんじゃネー。」

「お客様？テメーの所に来る客は剣の良し悪しも分からないボンクラばかりじゃネーか。」

そんな客ならアメでも売りやがれ。

剣を使うにゃ千年早いつてんだ。」

「どこに居るんだ？ソイツは。」

「この錆剣ですよ。旦那。」

ヤイ。デル公。いい加減にしねーと、テメーを溶かしてしまうぞ。」

「面白れー。もうこの世にや飽き飽きしてんだ。オレっちは。」

溶かしてくれるんなら上等だ！！」

「お前がデルフリンガーか？」

「おおよ。オレ様がテルフリンガー様。」

人呼んで伝説の剣とはオレ様の事だ。」

なんだよ・・・この自画自賛は・・・

「オイ、なかなかに言うではないか・・・おい、店主この剣貰うぞ、いくらだ。」

「へ???旦那、そんな錆剣の駄剣でヨロシイのですか?そいつでしたら100エキュー金貨程頂ければ結構ですよ。」

「なかなか、面白い剣だな・・・おい、金だ受け取れ」

そい言うて200エキュー金貨を渡した。

「旦那、100エキューですよ」

お、ごまかさなかつたな・・・以外だ。

「面白い剣だからな・・・色を付けた、受け取るがいい」

「へい、毎度あり」

「さて、アホルイズのところに帰るか」

そう呟きながら、店をのぞきながら帰路?についた。」

4 話（後書き）

次は決闘イベあたりまでいくよていです。

5話（前書き）

タル〜ウザ〜文化祭

すいません・・・予定まで全然行きませんでした。
あと超短いです・・・ほんとにすいません。

5話

「やっと寝たか・・・」

つか何時間耳元で説教言えば気が済むんだよ〜つか明日は早いから早く起こせとかしらねーよ勝手にやってろし

「ウザいから殺しつはまずいからな〜」

主に好きなキャラとのフラグ立て&楽しみを早くに潰したくは無理的な（笑）

「破戒すべき全ての符」
ルールブレイカー

バビロンから出した、ルールブレイカーをルイズに優しく突き立て契約を解除した。そして、バビロンからどこかの宝具（魔道書）を出して、新たな契約（fateのサーバント契約）を結んだ。

この我儘クソ女は何時まで、もつかな〜・・・まあ良いやどうせ3回しか命令権無いしね〜それより散歩にでも行くか〜まだまだ夜は長いしね〜

しばらく歩いているとコルベールがいた。

「おや、ルイズ君が召還した・・・」

「名はギルガメツシュだ」

「ああ、宜しくねギルガメツシュ君、ところで使い魔のルーンを見せてもらえるかい？」

「勝手にしろ」

まあ擬装用の腕に絵で良ければな

「・・・ありがとうもう良いよ」

早！

「今晚はワインでも飲みながら星を愛でるとするか・・・」

そう呟きギルは外に行き、屋根に飛び乗りワインを飲み始めた・・・

5 話（後書き）

コルベールがルイズを呼ぶとき君だっけ？

6話（前書き）

オリサーバント（まだ未定）投下するかもです。
あと気が付いたら1万2千pv突破しました。ありがとうございます。
そしてこれからも宜しくお願いします。

6話

「朝か・・・」

あゝ嫌だなゝアイツ起こすのゝあんな平地見たくねーよなゝ早くデ
ツカイ双子山見たいなゝ

そう思いつつルイズを起こしに掛かる

「起きろ小娘」

「んゝ・・・って、あんた誰よ」

「つち、貴様が召還したんだろうが」

「わたしの使い魔か・・・って小娘じゃなくてルイズって呼びなさ
いって言ってるでしょ」

いちいちウザゝさつさと外に行こゝつと

「ルイズ、貴様の腕にあるルーンは3回までの強制命令権があるが、
・・・3回全てを使い切ると、我とお前の契約が切れるからな、精々
上手くルーンを使うがいい」

そう言いながら部屋を出る

「ちよつと待ちな（ボタン）」

あんの平民・・・貴族の言うこと聞かないなんて・・・それに3回
の強制命令権って何よ、そんなの聞いたことないわ・・・

「どうしたものか・・・」

シエスタを探そうと思い、歩いていると何者かが後ろから着いてき
た。

彼ならお母様を治せるかもしれない。

そう思い、タバサは後を付けた・・・彼が何者なのかを知るために、
・・・

とりあえず人気の無い所までは来たな。

「我を付けるとはいい度胸だ・・・姿を現せ」

「・・・え」

なぜ？・・・魔法は使って無いはずなのに・・・

「姿を現さないのならこちらから行くぞ」

「・・・待つて」

タバサか・・・恐らく見た事の無い技やバビロンを見てこの未知の能力がある我なら親が治せると思ったのだろうな・・・まあ彼女は気の毒だからなく助けておくか

「我に何用だ、付けてくるからにはそれなりの事なのであろうな」

「・・・あなたには病気は治せる？」

「・・・どんな病か聞かせろ」

確かエルフの薬で魔力が使われていたんだよな・・・まあ魔力が使われているならルールブレイカーでどうにでもなるがな

タバサから親の病気や生い立ち、なぜ偽名なのかを聞いた。

「要するにエルフが作った薬が原因なのだな」

「・・・そう」

「フハハハハ」

「・・・何で笑っているの？」

殺気と怒気を混ぜながら、タバサは言う

「すまぬ、許せ・・・しかし、そのような容易な事を我に頼むとはな・・・この国のメイジとやはかなりランクが低いのだな」

「・・・治せるの？」

まさか・・・いろいろな水メイジが治せなかったお母様が治るなんて

「フハハハ・・・そのような簡単な事、手足を動かすのと一緒に程に簡単な事だ」

「・・・今から行こう」

タバサにしては積極的だな・・・まあ母親の事だからな、そりゃ積極的にもなるか・・・っんあそこで歩いているのはまさしくシエスタじゃないか・・・食事を運んでいるということはもう朝食の時間か・・・

「次の休みになら付き合おう」

デルフィイベントは潰したからなく行く必要無いしね

「・・・分かった」

良かった・・・これでやつと昔のお母様が帰ってくる

「用が済んだのなら我は行くが・・・もう良いか？」

「・・・付き合わせてしまつてごめんなさい」

「気にするな・・・君がかわいそうだと思つたから話に付き合い、助けようと思つただけなんだから（ニコ）」

ギルの顔で笑顔&優しく気使いアリな言葉を向けられて落ちぬ女などいない・・・多分

「・・・ありがとう／＼」

急に顔が熱くなつて彼の顔を見れない・・・どうしてなのだろう・・・

・
「じゃあこれで我は行くからな」

フイイイイツシュっしや次はシエスタだな

そう思いながら足早にシエスタの所に向かう

6 話（後書き）

次は必ず決闘イベまで行きます。

7話（前書き）

忙しいw

7話

タバサと別れた後シエスタを追ったのだが・・・

「ツチ・・・遅かったか」

目の前には、ワインシャワー＆叩かれたであろう赤いほほをさすりながらシエスタを土下座させてるギーシュがいた。

「その君。君のせいで二人のレディの名誉に傷がついた。どうしてくれるんだい？」

「真に申し訳ございませんでした。どうか命だけは取らないでください・・・お願いします。」

「そのメイド、謝る必要などないぞ、もとはと言えばその小僧がいけないのだからな」

「いきなり話に入ってきて君・・・ん、そういえば君はルイズが召喚した平民だったな？」

良いところで出てきやがって・・・

「だからどうした」

「君の態度が悪すぎる。君には礼儀を教えてやろうじゃないか・・・諸君今からこの平民に決闘を申し込む」

決闘と言えば泣いて命乞いをするだろ・・・なんせ平民は貴族に絶対勝てないからね、それに皆からの注目もまた集められるし・・・

「フハハハ・・・」

「おや、なにがおかしい？貴族に決闘を申し込まれておかしくなったか？」

「小僧、相手と自分の力量の差も見抜けぬようでは早死にするぞ」「な・・・」

こいつ・・・何で貴族からの決闘を申しこまれて、平気な顔をしていられるんだ・・・いや、平気な顔どころか笑っているだど・・・こいつはどこまで貴族を馬鹿にすれば気が済むんだ。

「ヴェストリの広場で待っている。本当に決闘したいなら来たまえ」

「分かった。」

ところでそのメイド、ケガはないか？」

「・・・殺される・・・貴族に逆らったら殺される。」

そう言っているとシエスタは走ってどこかに行ってしまった。

まあ良いか、面識もなかったし、それに原作でも決闘を影から見ていたんだよね、確か

近くの生徒に場所を聞いて俺はヴェストリの広場に移動した。

その間気がついたルイズに何度も止められたがシカトしました・・・
だってウザいんだもん

「とりあえず、逃げずに来たことは誉めてやろうじゃないか。」

これでこの平民を倒せば注目は僕に集まる

「誰が逃げるだと」

殺気を出しながら言った。

「ふん、強がれるのも今の内さ、さてと、そろそろ初めるか」

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。文句はあるまい」

「構わんから早くしろ雑種」

早くシエスタに会いたいんだから早くしろよな

「それといい忘れていたが僕の二つ名は『青銅』だ。従って青銅の
ゴーレムのワルキューレゴーレムで戦わせて貰う」

辺りから歓声が響き渡る

「おい、雑種・・・本気で来い・・・さすればその攻撃、この身に
届くやもしれんぞ」

まあかつこつけ位は良いかな

「その言葉後悔させてやる・・・」

薔薇の杖を振り全部で6体のゴーレムを出した。

「行けワルキューレ」

その言葉とともにランス装備のゴーレム（護衛を除く）が一斉に飛び掛ってくる

「ふん、攻撃が単調なのと全てがランスでの攻撃なぞ予測をして避けなくとも我の財のみで十分だ」

そう言つてバビロンから剣を出し自分の前に展開した・・・そして、その展開した剣に全ての攻撃を受けさせた。そして攻撃をしてきたゴーレムのランスは展開した剣に勢いよく当たると、ゴーレムのランスの全てが宝具の強度を超えられず砕け散つたのである

「な・・・何で・・・」

「どうして砕けたか教えてやろう・・・それは貴様が作り出した武器が余りに脆かったただけだ」

「あり得ない・・・だってこの僕が作り出した物が脆いなんてそんなことありえない」

「まあどうとでも言う方がいい

だが・・・もう少し楽しめると思ったのだが・・・興が冷めた」

そう言いななめ上に大きくジャンプをした。

「雑種には過ぎた物だな・・・食らうがいい

ゲートオブ・・・」

その掛け声に反応して背後には無数の宝具が出てきた。

「は、やばいゴーレムやつを止めるんだ。」

フ、もう遅い

「バビロン」

ズガガガ・・・音を立てながら目の前の5体のゴーレムを瞬く間に倒した。

「フハハハハ」

「なんだよ・・・これ・・・」

目の前には5体のゴーレムがバラバラになっていた。

「おい、もうこれは使わないでおいでやるからそのゴーレムで掛か
つてこい」

そう言いながら射出した宝具を元に戻した。そして代わりに刺し穿
つ死棘の槍ゲイ・ホルク

を出した。

「クソ、ワルキューレ行け・・・やつを倒すんだ。」

その言葉とともにゴーレムはギルにランスの猛攻撃をくらわせてい

る、しかしギルはその全てをゲイ・ボルグで受け流していた。

「フン、やはり弱いな・・・ケリを付けるぞゴーレム

その心臓・・・貰い受けるゲイ・ボルク」

ギルはそう言っただけで禍々しい程の赤いオーラをまとったゲイ・ボルクを突き出した。そして、人間でいえば丁度心臓が在る位置にその槍は直撃をした。その槍を受けたゴーレムは動かなくなっていた。

「まだやるか・・・雑種」

「ま、参った」

そんな・・・慢心は確かにあった。それは否定しない・・・いやおとなしく認めるべきだな自分の敗北を・・・

広場にギーシュの敗北宣言が響きわたりこの決闘は幕を閉じた。

7話（後書き）

戦闘シーンムズ

後オリ宝具&オリ真名解放がありましたらコメントを下さいこれは無いわ〜と思わない限り出します。もし誰からも出なかったらこのまま自由に行きます。

8話（前書き）

めっちゃ短いっす。すんません
pv2万5千突破しました〜ありがとございます。

8話

ギルガメツシュとギーシュの決闘を覗き視ていた者達がいた。

それは決闘の報せを秘書から受けた学院長オールド・オスマンと、別件で学院長を訪ねていたコルベールがいた。

ギルガメツシュのルーンが見た事のない物であり、偶然落としてしまった本の中の手に在るそれと酷似していた為、その絵本を調べた。そして見れば見るほどにその絵本の中のルーンに酷似しているのとさらに絵本の中のキャラクターがギルガメツシュと余りにも似ていたため、学院長に相談しに来ていた。

「学院長……」

「わかつておる」

「彼は一体何者なのでしょう……それにこの見た事のない文字が書いてある絵本や、中に描かれているルーンと彼の見た事のない魔法……」

「……とりあえずこの事は他言無用じゃぞ……この事を王室に知られたりしたら戦争の道具にされてしまうからの……」

「はい……確かに、あそこまでの強さを持つ彼なら戦争の道具として使われるでしょうね……」

分かりました。この事は他言無用にします。」

決闘が行われている最中にこのようなやり取りが行われ2人はギルガメツシュを監視することにした。

「まだやるか……雑種」

「ま、参った」

「っん」

ドン……ギーシュをはじき飛ばした。

「え……ぐわ」

一体何をするん……」

ギーシュは目の前の地面が見事に吹き飛んでいたのである

「ちょっと・・・あなた貴族に、ましてや決闘の最中の貴族に魔法を撃つなんて正気なの？」

外野にいたルイズは魔法を放った。生徒に対して抗議をしていた。

「雑種が我に手を出すとはな・・・」

ギーシュよりは楽しめそうだなあ殺るか

「ちょっとあんたまだやる気なの次は絶対に殺されちゃうわ」

「そうだ君がいくら強くとも彼は僕よりも数段魔法の技術は上なんだ・・・」

みな口々に言うだが・・・

「これから起こるは勝負ではなく、王による雑種への蹂躞よ。我の身を案じて出た発言ということで無礼を許す。が、次はないと心得よ」

一度は言いたい王さま発言w

「「「な」」」

みな今の発言により一瞬フリーズした。

「なめるなよ・・・平民が、そこにいるギーシュとは違うということを教えてやる」

「フ・・・マスター、別に殺してしまっても構わないな」

そう言い放ちギルガメシュは新たな敵に向かって歩き始めた。

8話（後書き）

テスト勉強&部活の大会などで忙しくしばらく書けないかも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9229x/>

ゼロの中二病

2011年11月26日03時51分発行